徳島ペンクラブ通信 第194号

2023年（令和5年）4月15日

発行

徳島ペンクラブ

１９６７年（昭和４２年）創立

徳島ペンクラブ総会案内（5月21日）

「令和5年度徳島ペンクラブ総会」を開催いたします。最近なにかと世情が騒がしく、ベクトルが混沌に向かっているかのように思われます。わがペンクラブも創立から56年が経ち、世の移り変わりに際して、いろいろな問題を解決し、今の時代の動きに即応しなければならないと思われます。本年度以降の方針を審議し決定いたしますので、会員の皆様多数のご参加そして貴重なご意見をお待ち申し上げます。（別途にて案内状を送付いたします）

なお当日（株）とくし丸取締役ファウンダー、住友達也氏の講演とランチ会食を行いますので、久しぶりの楽しい時間をお楽しみください。

記

1、日時　令和5年5月21日（日）午前10時30分開会

2、会場　ホテル　ザ・グランドパレス

徳島市寺島本町西1丁目60～1

TEL　088（626）1111

会費　3、000円

【掲載ページ案内】

P1　総会案内・とくしま随筆大賞募集　P3　ひとりごと

P2　ペンクラブ選集作品募集・各種受賞者　P4　リレーエッセイ・会員募集・ほんの散歩道

・新会員・協賛金・阿波の歴史小説

（43）読書感想文募集・お知らせ

第24回「とくしま随筆大賞」応募者募集

徳島ペンクラブ・徳島新聞社共催の第24回「とくしま随筆大賞」の作品を募集いたします。たくさんのご応募をお待ちしております。お知合いの方々にも応募をお勧めください。

応募規定は次の通りです。

一、応募資格　徳島県内在住者あるいは徳島県出身者

一、随筆　主張等の散文形式

一、内容　自由

一、未発表でオリジナルであること

一、書式

1、文字数は400字詰め原稿用紙3枚以上5枚までで、必ずページ数を記入してください。

2、作品名と氏名は、原稿用紙枠外に記載し、1行目から本文を始めてください。

3、別紙に作品名・氏名（フリガナ）・性別・年齢・郵便番号と住所（中高生や大学生の場合は、学校名と学年も併せ）を記入して、原稿に添付してください。

（この個人情報は、本募集に関する以外には、決して使用いたしません）

4、作品は日本語に限ります。

5、作品は郵送に限ります。発送後の原稿返却及び原稿の訂正は、お受けできません。

一、作品の送り先

〒770－0873　徳島市東沖洲2丁目1～13

徳島県教育印刷（株）内

徳島ペンクラブ「第24回とくしま随筆大賞」係

一、応募締切　2023年6月30日（当日消印有効）

一、入賞発表　8月下旬。徳島新聞紙上

受賞者には、直接連絡いたします。

一、賞

▽とくしま随筆大賞（1名）

賞状・賞金3万円・徳島新聞掲載

▽徳島新聞社賞（1名）

賞状・賞金3万円・徳島新聞掲載

▽優秀賞（3名）

賞状・賞金1万円

▽奨励賞（若干名）

賞状・賞金5千円

一、表彰式　9月上旬（状況により変更）会場　県立文学書道館

一、審査員

▽依岡隆児　徳島大学総合科学部教授

▽柏木康浩　徳島新聞生活文化部記者

▽丁山俊彦　徳島ペンクラブ会長

▽竹内菊世　同人誌「飛行船」代表

（次ページへ続く）

（前ページに続く）

一、詳しいことのお問い合わせ先
徳島ペンクラブ「とくしま随筆大賞」
実行委員会委員長
上窪青樹
Tel.　090―7142―2852

❖ペンクラブ選集ＰＡＲＴ41作品募集

ペンクラブ選集ＰＡＲＴ41の作品を募集いたします。本号に特集はありませんので多くの一般原稿を発表下さるようお願い申し上げます。奮ってご寄稿ください。

❖一般原稿
散文作品　随筆・評論・短編小説など
韻文作品　俳句・川柳・短歌・連句・現代詩・漢詩など

❖テーマと作品応募について
テーマ　自由
応募は、４００字詰め原稿用紙を基本とし、原稿には必ずページ数をご記入ください。手書き原稿の場合は、必ず2通のコピーをとって、その一通と本稿とをお送りください。
原稿を受け付け次第、その旨電話連絡いたしますので、電話番号もご明記ください。
(注)ご投函後、2～3日経っても連絡がない場合、お手数ですが、確認のため編集担当者（後述）までお電話ください。

❖作品の掲載負担金その他について
1、見開き2ページを基本として負担金8、０００円、追加1ページごとに、3，０００円（以上予定中）を加算させて頂きます。
諸事高騰の折柄、ご理解ご協力くださいますようお願い致します。
2、原稿受領後、会計から送付いたします請求書により、郵便振替または銀行振込等で御納入ください。
3、原稿締切　２０２３年9月末日必着
4、原稿の送り先（編集担当者）
〒771-4262　徳島市丈六町長尾６２－１５
関　眞由子　宛
Mail　mayu02040@ma.pikara.ne.jp
Tel.・Fax　088―645―1840
5、原稿をメールでお送りくださると、後の編集が助かります。メールを普段から御利用の方は、よろしくお願い申し上げます。

❖受賞おめでとうございます　（本会会員紹介）

❖第19回夢道忌俳句大会
最優秀賞　山之口　卜一　様
優秀賞　上窪　則子　様

❖徳島歌人クラブ秋季大会
優秀賞　山崎　泰子様

❖第20回　とくしま文学賞
短歌部門　優秀賞　本田　まもる様
俳句部門　優秀賞　山之口　卜一様
優秀賞　長町　淳子様
連句部門　最優秀賞　早見　敏子様・二橋　満璃様
優秀賞　竹内　菊世様・東條　士郎様
洛中　落胡様・関　真由子様

❖第11回泉大津市オリアム随筆賞
最優秀賞　渡辺　恵子様

益々のご活躍、期待いたします

❖新会員紹介

昨年度から新しくご入会された方々を紹介します。皆様よろしくご活躍ください。
伊丹　悦子　様　現代詩・随筆（丁山会長紹介）
鞆谷　日出夫様　随筆・評論（鈴木　綾子様紹介）
横手　久典　様　俳句（神原　常経様紹介）
（50音順）

❖個人の徳島ペンクラブ協賛金のご提供

徳島ペンクラブに、個人としての協賛金をお寄せ頂き、心から感謝いたします。
御提供の方々の御芳名。
新開　英毅　様
竹内　菊世　様
野上　恵子　様
船越　淑子　様
（50音順）

❖阿波の歴史小説（43）「阿波の川ものがたり」読書感想文　原稿募集中！

主催　阿波の歴史を小説にする会・後援　徳島ペンクラブ

【お知らせ】
1、春の文学散歩は、コロナ禍のため昨年に引き続き取り止めました。
2、「とくしま各駅停車の旅」パネル巡回展」の予定は終了いたしました。
ご協力ありがとうございました。

間もなく八十路

住友武男（敬治）

間もなく八十路。村田喜代子氏（芥川賞作家）は、「老いることは決して寂しい事ではない。今を大切に生きることが大事……」という。老いという新世界へ、前向きな彼女。作家の天性なのだろうか。…たしかに①老年は情熱を失う。②肉体は衰える。③快楽も遠ざかる。④死と直面する。…

これをポジティブに捉えると、①は仕事を与えれば、生き生きと精魂を尽くす。②では経験の知識、判断力、直観力は冴えている。③は情欲から解放され物事を客観的に視ることができる。④の死に直面する老境こそ充実期だ。と何事も前向きにとらえるようにしたいものだ。

八十三歳で警備をする友人は、収入も大事だが、それより生き甲斐が…」という。

若い頃二百枚書いていた賀状も今六十枚に減った。目も耳も鈍くなった。日課の散歩も減った。だが老境こそ充実」の日々だと、「阿波の歴史小説」の同人として、郷土のことをもっと知りたいと願う日々です。

「ダービー」の思い出

宮内史郎

私は趣味らしいものがなく、強いて言えば家庭菜園と競馬である。家庭菜園は50歳を過ぎて始めたので、20年余りで少ない。競馬は学生時代から始め、50年以上にもなる。昭和43年に東京の私大に入学し、当時は70年安保改正の前年で、条約改正に反対する学生、労働者などのデモがあり、渋谷・新宿駅前などで大勢の人がヘルメットを被り、徒党を組み、マイクで叫んでいた。

そんな時代を背景にした東京では、大学が過激派の学生に占拠され、大学側がロックアウトするなど騒然としていた。私の大学では一部学生がキャンパスで騒いでいたが、比較的静かであった。休講も多く、自由な時間に恵まれた。高校時代の友人も関東に多く出てきており、世田谷区池尻にある私のアパートによく集まっていた。

M君が昭和46年6月13日の朝早く来た。寝ていた私を起こし「今日は競馬の祭りじゃ、馬券を買いに行こう」と誘われた。私は五千円しか持っていない。当時からダービーは特別で競馬をしない人もダービーだけは馬券を買う人が多かった。私も釣られて千円を握りしめ売り場に行くと、人だかりで賑わっていた。私は初めての競馬のため、どのように買うかわからないまま、枠連で5―5のゾロ目を買った。

アパートに戻り、友人数名でテレビを観戦した。今はフルゲート18頭だが、当時のダービーは28頭の多頭数であった。5枠14番のヒカルイマイが20頭をごぼう抜きして1着になり、2着にはハーバーローヤルが入り、買っていた馬券の5-5が的中した。

私の当時の仕送りは月3万円で生活していた。競馬で得た金額は仕送り2か月に近いものであった。若気の至りでブランドの洋服を買った残りの大半を友達の暴飲暴食で散財し、悪銭は身につかなかった。その大金の振る舞いが功を奏して、今もって友情を半世紀に渡り温め合っている。

我がふるさとの今

横手鉄格子

この度、徳島ペンクラブの皆様方のご推薦を得て入会させていただきました横手鉄格子（本名　久典）です。神原鹿山先生に句会にお誘いいただき、ご指導を賜りながら現在に至っております。まだまだ、未熟ものでありますが、よろしくお願いいたします。

私は、昭和35年に阿南市中林町に生まれました。西日本でNO1と謂われた北の脇海水浴場が幼少の頃からの遊び場でありました。波打ち際まで続く白い砂浜は、夏は裸足だと一気に走りぬかなければ火傷をするくらいに距離があり、防風の役割も果たしつつも美しさと雄々しさをもつ松林を有する海水浴場でありました。

その後、沖合に施された消波ブロックで、砂を運び持ち帰る波が来なくなり「白砂」は灰色、砂浜の距離も短くなる始末、「青松」は酸性雨によって枯れ変色し、景色は一変。もはや、我が故郷は記憶の中でしか見えないのかも。爺のふるさとを孫に見せたかったと思っております。

人生の縮図

渡辺恵子

令和五年三月。泉大津市オリアムエッセイ賞の表彰式があった。随筆を書き始めて十一年。私にとって十一回目の最優秀賞だった。

選考委員の四人の作家の選評を聞きながら、私は複雑な思いに駆られた。

私の作品は終始ポジティブで、起承転結の「転」がなく、私がいつもこだわっている「タイトルと最後の一行」も陳腐で、何のオチもひねりも入れられなかったのに、結果はこうなった。今まで「これは絶対にイケる！」と、自分が酔いしれるような作品は、ほとんど落選し、たとえ入賞できても下位だった。

今回全受賞者の作品を読んでみても、自分はここまでの文章はとても書けないと思った人がいた。

私がこの十一年間で気付いたことがある。入賞するのは本人の努力次第で可能かも知れないが、「一番」だけはまったく別物で、文章が最も上手い人に軍配が上がるわけではない。

審査員の好み、その時の心境、時代背景等、自分ではどうすることもできない外部の要因が反映される。

今回の受賞者の中で一番運が良かったのが私だったのだ。

いくら頑張っても報われない時もあるし、風に乗って流されているだけでラッキーゾーンに舞い込んでいくこともある。

これはまるで人生の縮図のようだ。

（以上投稿順）

☀ひとりごと欄とは？

「ひとりごと」欄は、気楽な気持ちで「ふっ」と漏らす一言を、そっと耳打ちするコラムです。

ひとりごと・・・
ひとりごと

リレーエッセイ

今まさに言論統制下、そして洗脳？

高木　純

社会を揺るがすとんでもない事実をマスメディアが取り上げない？　政府どころか野党をも窮地に追い込む事件をニュースにしない？　首を傾げるどころか、恐ろしいことが今起きている。

何が報道されず、マスメディアが知らん顔しているのか、それは厚労省が発表しているコロナワクチンの副反応報告だ。厚労省発表２０２３年１月20日、コロナワクチン接種後の死亡１、９６６人。重篤な副反応２９、２４９人。この報告には、亡くなられた状況や、重篤な副反応について詳しく書かれている。

これは歴史上最悪の薬害事件と言える。当然のことながら訴訟が起きる。ワクチン接種後に死亡された方の遺族が準備している。約１２０人の集団訴訟になるそうだ。その記者会見を大手マスメディアは無視した。報道したのは名古屋の放送局一社のみ。

報道しないのはこれだけではない。コロナワクチンのネガティブな事実は全てシャットアウトしている。「２０２３年５月に治験終了」これがなんのことか分かるだろうか？　このワクチンは今まさに治験中で、言い換えれば人体実験中なのだ。

「まだ治験が終わっていない、つまり安全性が担保されていない」という専門家もいたが、いつのまにかテレビに出なくなった。そして国、マスメディアあげて「ワクチン打て、打て！」の大合唱。しかしそれでどうなった？「50％が２回打てば集団免疫ができて収束する」と言われていたが、そうはならなかった。３回目、４回目、５回打つ人もいて、接種したのに感染した人もいる。もう何が何やら…である。

ワクチンに対して否定的な情報は遮断して、肯定的な情報だけを洪水のように垂れ流した結果がこれだ。そして、先にあげた副反応は急性期のものだ。怖いのは、長期的な副反応だ。

人類史上初めてのＲｎａワクチン。今何もなくても2年後、５年後、さらには次世代に影響はないのか？　もし何かあったとして文句は言えるのか？　なにしろ、自ら進んで治験（人体実験）に参加し、子供も実験に差し出したのだから。私たちは知らぬ間に、マスメディアに洗脳された。

そう思うのだ。

●ペンクラブ会員募集にご協力ください。

新しい感性を持つ若人から現役の社会人そして長く人生を歩み見つめてきた熟年の方、さらに滅多に経験できない経歴の持ち主等々、できるだけたくさんの人々が集う文芸誌が理想です。会員の皆様の周りにそのような人がいらっしゃれば、ぜひご勧誘ください。多彩な人格の中で、自らも磨きましょう。

連絡先　徳島ペンクラブ事務局　Tel　090―2787―7614　鈴木　宛

ほんの散歩道

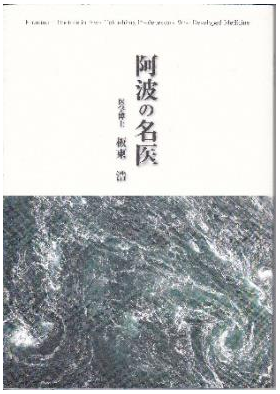
最近書籍を出版なさった方は、ご連絡ください。

「阿波の名医」　～歴史を築いた先人たち

著者が徳島大学医学部同窓会誌「青藍会会報」に長年にわたり連載してきた「阿波の名医」シリーズを集大成した逸品です。

江戸時代末期から現在まで、徳島の医道を支えた人々の経緯が、隈なく網羅されている貴重な永久保存版です。

- ●Ｂ５判　９６頁
- ●定価　一万円+税
- ●著者　板東　浩
- ●発行　株式会社ステラ・メディックス



あとがき

機械づくりに余念がなかった頃、手に持つ薄い金属板の厚みや、指で摘まんだネジのサイズが感覚で分かった。それと同じように文字も意識せずとも指先がすらすら書くものである。つまり手や指先が文字の筆順を記憶しているのである。手と指を司る脳の部位が文字の記憶の一助となっていた。今は文字をキーボードで打つから、打ち込むキーの位置は覚えても、文字そのものを手が覚えない。文字はその記憶中枢だけに任され、それを補助する手段を失うことになる。いきおい文字を手で書くのが面倒になり、身体と文字との触れ合いが空疎になってゆく。この傾向は老若を問わないだろう。

今や文字は書くのでなく、打って印刷するのである。従って手元に機器がなければ文字を記録し辛くなる。ペンと紙さえあれば、かなりな数と種類の文字を難なく書くことができた古い時代を懐かしむことになりはせぬかと老爺心ながら心配するのだが…。

（粟）